

髪が握る鍵／ Hair and wellness

アイシャ ナジンデ

Aisha NajiNde

唐突ですが、あなたの考える豊かな生活とはなんですか？ 巷でも耳にすることが増えたウェルネスやウェルビーイングと聞くと、身体の健康のことやスパなどを思い浮かべる人が多いかもしれません。「ウェルネス」'Wellness'という言葉自体は、1961年にハルバートダン（Halbert L. Dunn）医師が、健康を身体の側面だけでなくより広義に総合的に捉えた概念として、「輝くように生き生きしている状態」と提唱したのが最初の定義とされています。時代の流れや、人によってウェルネスの捉え方も違うところがおもしろくもあります。

私たちミックスは日本に暮らしていると、周りの人からの理解が得られなかったり、日本人の友だちと比べてしまったり、自分のアイデンティに疑問を持ってしまうこともあるでしょう。私たち特有の悩みやもがきは、自分らしく「輝くように生き生き」するのは難しいと感じる場面もあるかもしれません。

横文字になると固く考えてしまうかもしれませんが、私はウェルネスという言葉のもとになっている「ウェル」'Well' に注目しています。Wellには健康という意味はもちろんのこと、満足、上手、適切、裕福、素晴らしく、などの意味が含まれているので、簡単に考えると、ウェルネスとは、より満たされ、豊かになり、ベストな状態になるためのモノやチョイス、行動、思考などのことだと私は考えています。なので、どんなモノ・コト・ヒトもウェルになれるきっかけの鍵を持ちうると信じています。

今回は黒人にとっての髪の毛の存在や関係性、ヘアケア、アフリカやアフリカン・アメリカンの文化をこのウェルネスとリンクして話していきます。グローバル化が進む日本、そして世界が全体的に豊かになるために人も環境もウェルネスに満たされることが大切です。「文化やヘアにウェルネスって関係ないし！」と思われるかもしれませんが、まずは、私の自己紹介を兼ねて実体験からウェルのつながりをご紹介します。

私はニューヨーク州のブロンクスという場所で、ガーナ人でイスラム教の父と日本人の母との間に生まれました。母は、日本でブレイディングとカーリーヘアを専門に活動している美容師の第一人者です。大半の幼少期を日本で過ごしましたが、年に数回はニューヨークを訪れ、物心がつく前からアメリカのブラックカルチャーやヘア商品に囲まれて育ちました。13歳からは人口の90%が白人でほとんどの人がモルモン教のユタ州にホームステイ（黒人は1%くらい）するなど、多様な人種や宗教に触れながら育ちました。ユタで暮らしているときは、それまではいつでも母に髪をかわいく編んでもらえていたのに、周りにカーリーヘアの人もいなければ、黒人が行けるようなサロンもなく、今までとはまったく違う環境にストレスを感じてしまいました。ユタから日本に戻ったときは、いろいろと考えることがあり、生きる意味や人種のこと、宗教や文化のことを知りたい！と思うようになりました。

そこで文化人類学に出会い、ブレイディングの深い文化や今まで流していたことなどをリサーチすることが増えたのです。歴史や文化を深く知ることで、母が編んでくれるブレイズをしている自分に自信が持て、自分の髪の毛に誇りを持つことができました。たかが髪の毛と思っても、そこから知識が生まれ、自信が生まれたりすることもあれば、ストレスで髪の毛が抜けたり、自分のアイデンティティを疑う原因になることもあります。私たちの身の回りにあるすべてが常に私たちの「豊かさ」に影響を与えているのです。

黒人にとっての髪の毛

髪の毛は女性の命とも言われますが、黒人にとって髪の毛は大切な文化の一部、歴史の一部、ライフスタイルの一部でもあります。2019年に行われた調査に

あいしゃ なじん で：1993年に米国ニューヨーク州ブロンクスで日本人の母とガーナ人の父の間で生まれる。米国で設立された、ホリスティック・ヘルス & ウェルネス・カンパニー The WellLi Co. LLC の代表。ニューヨークの Institute of Intergrative Nutrition を卒業したのに加え、ポジティブ心理学やマインドフルネスをはじめ100以上のディプロマを保持する。ハーバード・ビジネス・スクールのアフリカでのアントレプレナーシッププログラムも修了した。アフリカをウェルネス大陸にすることが夢。National Wellness Institute と Spa and Wellness Association Africa の現メンバー。

よると、アメリカの黒人女性は他の人種に比べてなんと9倍もヘア商品にお金をかけているそうです。大昔にさかのぼると、アフリカでは何時間もかけて髪の手入れをすることが普通だったと言われ、髪の色が階級や民族の証で、髪の色をケアすることができる人はグループの中でも信用されていました。欧米による奴隷制や植民地化の前は、髪の色に誇りを持つことができていたのに、奴隷として連れて行かれて最初に奪われたものが髪の色で、髪の色をそられ誰がどこの民族なのかわからないようにしたという話もあります。それ以後、黒人の髪の色は差別のもととなり、なるべくヨーロッパ人に近い髪型になるように、ストレートにするのが一般的になりました。奪われたアイデンティティを取り戻すという意味も込めて、1960年代後半にアメリカで発足したブラックパワー・ムーブメントではあえて髪の色はナチュラルに、アフロのままにすると宣言しました。

日本ではまだまだ知られていない ブラックヘアの奥深さ

このように、ヘアブレイディングやカーリーヘアにはさまざまな歴史がありますが、残念ながら日本では詳しくは知られていません。アジアの他の国に比べると、日本ではブレイディングサロンは多く、都会に行けば施術ができるという人を見つけることができます。ですが、ちゃんとカーリーヘアやヘアブレイディングの重要性を理解して、志を持って髪を編めている人が少ないのが現状です。そこを変えるために母が、Hair Braiders Association Japan⁽¹⁾ という一般社団法人を2018年に設立しました。外国人やミックスの人などさまざまな髪質やヘアのニーズに応え、多様な美を受け入れることができるプロフェッショナルを日本で増やすために、正しいブレイディングの技術を教えることがメインとなります。この団体を通して、髪の色と美をもっと広い範囲で影響を与えられる可能性があると感じました。私は髪の色を編むことはできませんが、せっかくだから髪の色を通して日本に住むミックスの人たちをもっとウェルにすることができたらいい

“TONEZ” 創刊号
(2021年12月発行)



“TONEZ” ダウンロードサイト <https://www.hbajapan.org/post/> デジタルマガジン『tonez』創刊号リリース

などと思います。

そこで、興味がある人が気軽に髪の色を知ることができるアイテムを作ることができないかと母に相談を持ちかけ、デジタル・マガジンの“TONEZ”が誕生したのです。企画から制作まで私と母で行っているので、大変なところはもちろんありますが、読んだ人が自分の髪の色をもっと大切にしたいくなるような内容を書くことによって、少しずつでも、1人でも輝いて暮らせるきっかけになればうれしいです。

変わる日本をもっとウェルに

どんなに小さく見えることでも、どんなに小さな変化でも、一つが変わることで、大きくウェルの連鎖が広がると思います。

髪の色という一つのトピックからでも、心もカラダも豊かになれるような環境作りを始めることができます。例えば、“TONEZ”を読んでくれたミックスの方が正しい髪の色の手入れ方法を知ることによって新しい自分を見つけ、もっと自分を好きになったり、たまたま読んだ人がブラックヘアに興味を持ち、ミックスの子が校則のせいで髪型に悩まされている子たちが多いことを知り、変化をさせることに協力したい！と思うかもしれません。自分に自信を持つことで、人に優しく接することができるようになったり、その人しか持っていないイノベティブなアイデアを、自信を持って発信できるかもしれない。今までは黒人文化に興味を持っていなかったけど、ブレイディングを知ることによって周りの人にブレイディングの素晴らしさを伝えて、偏見を持つ人が減るかもしれない。

そういった小さな変化が、どんどんと広がり、どんな人でも輝きながらイキイキと暮らせるような日本に変わっていくのではないのでしょうか。

(1) <https://www.hbajapan.org>



“TONEZ” 次号掲載用撮影のためのスタイリング中
タイ・バンコク 2022年9月10日